HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 平成20年度北海道大学教育ワークショップ報告 |
| Author(s) | 西森, 敏之; 安藤, 厚; 細川, 敏幸; 山田, 邦雅; 山岸, みどり; 鈴木, 誠; 池田, 文人 |
| Citation | 高等教育ジャーナル : 高等教育と生涯学習, 17, 99-124 |
| Issue Date | 2010-01 |
| DOI | 10.14943/J.HighEdu.17.99 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/47997 |
| Type | bulletin (article) |
| File Information | JHELL17_009.pdf |

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 平成 20 年度北海道大学教育ワークショップ報告

西森　敏之[1)*]，安藤　厚[2)]，細川　敏幸[1)]，山田　邦雅[1)]，
山岸　みどり[1)]，鈴木　誠[1)]，池田　文人[1)]

[1)] 北海道大学高等教育機能開発総合センター，[2)] 北海道大学大学院文学研究科

# A Report on the 2008 Hokkaido University Workshops on Education

Toshiyuki Nishimori[1)**], Atsushi Ando[2)], Toshiyuki Hosokawa[1)], Kunimasa Yamada[1)],
Midori Yamagishi[1)], Makoto Suzuki[1)] and Fumihito Ikeda[1)]

[1)]Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University,
[2)]Graduate School of Letters, Hokkaido University

*Abstract* — In 2007, Hokkaido University made a change in the system of faculty-development activities. Before the change, the old system consisted of : (a) a one-day course for teaching asisitants in April, (b) a one-day course for new teaching-staff members in June, and (c) a two-day workshop about education for teaching-staff members in November. In the new system the one-day course in (b) was replaced by a two-day workshop quite similar to the one in (c). The two-day workshop in (c) was introduced in 1998 to improve the education of Hokkaido University and it has been held once a year since. We have experienced the new system for two 2 years and met many young participants. The purpose of this report is to explain what was done in the two-day workshops in 2008.

The first two-day workshop (in June) had 31 participants from all over Hokkaido University, and the second one (in November) had 31 participants from all over Hokkaido University and 7 participants from 7 other institutions. The main theme was to learn how to develop new courses. Furthermore, we choose an additional theme each year, and in that year's workshops it was to plan courses fascinating students. Each of the workshops had (1) three sessions about planning of courses, each of which consisted of mini lectures, small group discussions and a general discussion, and (2) two lectures, one about the purpose of faculty development and the other is one about the meaning of 'respecting the requirements for credits more strictly' in the first workshop (in June), and one about the various problems of harassment in the the second workshop (in November). The main contents of this report are the syllabi of the courses worked out in the workshops.

(Received on March 31, 2009)

*）連絡先：060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目　北海道大学高等教育機能開発総合センター
**）Correspondence：Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University, Sapporo, 060-0817, Japan

## 1. はじめに

北海道大学では，高等教育機能開発総合センター高等教育開発研究部が主催して行う全学的ファカルティ・デベロップメントの構成を，2007 年度から変更した。

2006 年度までの変更前には, 4 月の「TA 研修会」, 6 月の「新任教員研修会」，11 月の「北海道大学教育ワークショップ」の 3 つの研修会が行われていた。

4 月の「TA 研修会」は，1 学期が始まる直前に行う全学教育のティーチングアシスタントに対する 1 日コースの研修会であり，研修は 1 回受ければよいということで，200 ～ 240 名程度が参加する。午前中は大講堂で「TA のあり方」,「北海道大学の全学教育」,「TA の体験談」などが話題になる。午後は 2008 年度の例でいえば「一般教育演習」,「一般教育演習／フィールド」,「講義」,「論文指導」,「情報学」,「英語 II オンライン授業」,「英語 II 以外の英語の授業」,「初習外国語」,「中国語」,「文系基礎科目」,「心理学実験」,「理系基礎科目」,「自然科学実験」の 13 の分科会に分かれて行われている。

6 月の「新任教員研修会」は，第 1 回は「新任教官歓迎説明会」という名称で，高等教育機能開発総合センターが発足した 1995 年に開始されたものであり，当初は 2 日間の講演会形式であった。毎年少しずつモデルチェンジし，最後の 2006 年には，北海道大学に 1 年以内に赴任してきた新任教員を対象とする 1 日コースの研修会であり，4 ～ 5 本の講演と 1 セッションのグループ討論の組み合わせであった。

11 月の「北海道大学教育ワークショップ」はキャンパスを離れて 1 泊 2 日で行う研修であり，参加者を約 8 名ずつの 5 グループに分け，30 分程度のミニ講義群とグループ討論を通じて，大学教育の基礎とシラバスの書き方を実践的に学習するものである。

さて 2007 年度からの変更点であるが，6 月の 1 日コースの「新任教員研修会」の代わりに，新任教員を主な対象として，1 泊 2 日コースの「北海道大学教育ワークショップ」を行うということである。11 月に行う「北海道大学教育ワークショップ」も新任教員を主な対象とすることにして，新任教員に対する研修を充実させるという試みである。

以上のような経緯で，2007 年度より，「北海道大学教育ワークショップ」が 1 年に 2 度行われることになった。

この報告は，2008 年度に，6 月と 11 月に行われた 2 回の「北海道大学教育ワークショップ」の内容と，そこで得られた成果（すなわち，5 グループに分けられた参加者によりグループごとに作成された新しい科目のシラバス）を記録である。

## 2. 2008 年 6 月の「北海道大学教育ワークショップ」

### 2.1 参加者，プログラムなど

2008 年 6 月 6 日（金），7 日（土）の両日，「単位の実質化を目指して」というテーマで，奈井江町農業改善センター（奈井江温泉ホテル北乃湯）で，第 12 回目の北海道大学教育ワークショップ（FD）が行われた。

今回の参加者は，本学の研究科及び研究所等から（主に北大に着任後 5 年以内の若手）教員 31 名に，世話人，講師，事務職員など合わせて総勢 41 名であった。

今回のワークショップのサブテーマは，「魅力ある授業を目指して」であるが，学生に自主的学習を促す魅力ある授業を作り上げることを目指すのであって，単位数に対応する標準的な学習時間を実現したいということが根底にある。これには，2006 年度から「履修単位の上限設定」を新入生に対して導入し，1 科目当たりに学生が割ける時間を増加させ，「2 単位は 90 時間の学習に相当する」という国際基準を念頭において，「単位の実質化」の実現をはかることが，全学教育における現時点での最重要課題となっているという背景がある。

1 日目の 6 月 6 日は，事務局大会議室に集合した後，研修会場の奈井江温泉行きのバスで出発し，高速道路に乗ってから，例年のように，参加者の自己紹介で研修会が和やかな雰囲気で始まった。表 1 のプログラムのように，会場到着後早朝と一緒に記念写真（写真 1）を撮り，佐伯総長の挨拶（写真 2）

写真１．記念写真

写真２．佐伯浩総長の挨拶

写真３．細川敏幸教授のミニ講義

表 1．第 12 回（平成 20 年 6 月全学 FD）の北海道大学教育ワークショップのプログラム

## 2008 年 6 月 6 日（金）

8:30　事務局大会議室に集合・受付
8:45　バス　出発　　研修開始：オリエンテーション挨拶
9:55　ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着，玄関前で記念写真

10:00　挨拶「FD 実施にあたって」（20 分）（佐伯総長）

10:25　ミニレクチャー「FD の目的と意義」（25 分 + 質問 5 分）

10:55　休憩（15 分）

11:10　ミニレクチャー「単位の実質化の方策について」（40 分 + 質問 5 分）

12:00　昼食　60 分

13:00　研修のオリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレーキング（30 分）

13:30　ミニレクチャー「カリキュラムの構成要素とシラバス」「学習目標」（30 分）
14:00　グループ作業 I の課題の説明・グループ学習室への移動（10 分）
14:10　グループ作業 I「授業の設計 1：科目名・目標の設定 」（60 分）
15:10　発表・全体討論（40 分）

15:50　休憩（20 分）

16:10　ミニレクチャー「教育方略」「授業例：蛙学への招待」（30 分）
16:40　グループ作業 II の課題の説明・グループ学習室への移動（10 分）
16:50　グループ作業 II「授業の設計 2：（目標の手直しと）方略」（60 分）
17:50　発表・全体討論（40 分）

18:30　夕食（40 分）
19:10　講演「ハラスメントの段階と相」（大畑　昇／歯学研究科教授）（30 分）
20:00　懇親会

## 2008 年 6 月 7 日（土）

7:30　朝食

8:30　ミニレクチャー「評価」（30 分）
9:00　グループ作業 III の課題の説明・グループ学習室への移動（10 分）
9:10　グループ作業 III「授業の設計 3：（方略の手直しと）評価」（60 分）
10:10　発表・全体討論（40 分）　　–休憩（10 分）–

11:00　参加者の個人的感想や意見（50 分）

12:00　昼食（60 分）

13:00　バス出発
14:30　ＪＲ札幌駅北口到着

ののち，細川教授によるミニ講義「FDの目的と意義」（写真3），安藤教授による「単位の実質化の方策について」（写真4）があって，昼食となった。

昼食後，研修のオリエンテーションとして，講演会でなく参加者がグループ作業をして成果を上げるという意味で「ワークショップ」という用語を使っていることを説明し，作業がスムーズに進行するために重要なアイスブレーキングを，グループ名を決めるとか小さな課題をいくつかグループ作業で行い，本格的なグループ作業に入るための準備を行った（写真5）。

ワークショップのメインプログラムでは，参加者を4グループに分け，学生に魅力ある授業にするための工夫を盛り込んだ新しい授業を設計するという課題で，グループ作業を行った。

授業の設計は，3回のセッションに分けられ，(I) 科目名と目標，(II) 方略（15回分の授業内容），(III) 評価基準，の順に行われた。おのおののセッションは，

（1）30分程度のミニ講義（写真6），
（2）小グループでの60分の討論（写真7～10），
（3）討論の成果の発表会（写真11～15），

という3つの部分からなっている。

より具体的には，参加者全員を名簿順にA，B，C，D，A，B，C，D，… のようにグループ分けし，各グループがさまざまな専門の人たちからなるようにした。それぞれのグループには，授業のタイプをあらかじめ指定されていて，具体的には

写真4．安藤厚教授のミニ講義

写真5．アイスブレーキング

写真6．鈴木誠教授のミニ講義

写真7．グループ討論1

A： 一般教育演習（学生数 20）
B： 一般教育演習（学生数 20）
C： 総合科目（6 名程度の講師が交代で行う）
D： 大学院共通授業（6 名の学部長が等が講師）

のような設定の科目を設計するという課題に挑んだ。

1 日目は，午後に，「科目名と目標」と「方略（15 回分の授業内容）」，についてのグループ討論を行った。

夕食後には，大畑昇歯学研究科教授による講演「ハラスメントの段階（ステージ）と相（フェーズ）」（写真 16）を行い，その後懇親会を行った。

2 日目の午前に，「評価基準」についてのグループ討論を行い，1 日目と合わせて 3 回のセッションに分けてシラバスを作成した。

## 2.2 プロダクト

2008 年 6 月のワークショップで得られたプロダクト（シラバス）を紹介することにして，まず目次代わりに科目名のみを紹介しておく。

＜グループ A ＞

写真 8．グループ討論 2

写真 9．グループ討論 3

写真 10．グループ討論 4

写真 11．討論成果の発表 1

一般教育演習　「『現代社会を斬る！』～大学生らしい議論の作り方～」

＜グループＢ＞

一般教育演習　「北海道の食未来」

＜グループＣ＞

総合科目　「環境破壊・再生と技術」

＜グループＤ＞

大学院共通授業　「水と生命の循環」

写真 12．討論成果の発表２

写真 13．討論成果の発表３

写真 14．討論成果の発表４

写真 15．全体討論

写真 16．大畑昇歯学研究科教授の講演

# 第 12 回（2008 年 6 月）教育ワークショップのプロダクト

（以下は，各グループの提出した成果である OHP と
記録を参照して，報告者がまとめたものである）

## （2008 年 6 月）グループ A のシラバス

橋本　雄（文学研究科），川村　　力（法学研究科），大宮 寛久（理学研究科），
木村 一 郎（工学研究科），長谷部 理絵（獣医学研究院），久保 拓弥（地球環境科学研究院），
小野塚 久夫（保健科学研究院）

### ＜科目設定＞

【科目名】 一般教育演習「『現代社会を斬る！』～大学生らしい議論の作り方～」
（テキストを正確に読む，データに基づく，いろいろな立場で。）

【一般目標】

公平な議論を構築するために，先入観にとらわれずに多角的に物事を見ることができる。

【行動目標】

・ニュース，新聞等のメディアテキストを批判的（客観的）に読み，「事実」と「意見」を区別して解釈することができる。
・適切な資料を取捨選択できる。
・自分の意見をわかりやすく伝えることができる。
・他人の意見を理解し，相対化することができる。

### ＜方略＞

とりあげるトピック

⑴ 4 回・・・ゆとり教育の功罪
⑵ 3 回・・・世界史必修，是か否か
⑶ 4 回・・・死刑は廃止すべきか
⑷ 4 回・・・地球温暖化のウソ・ホント

※ 基本テキストは共有する。
※ グループ分けにより議論する。

① 全体ガイダンス

・演習の目的／流れ A・B・C・D グループ分け
・○○○○の作法
・ テキストの配布（次回～）
・テーマの紹介，背景説明（適宜）←教員 or TA
・課題→次回の前日までに提出。

Q1…要約してきなさい（事実／意見区別ハッキリ）
Q2…意見をすべき問題点
⇒『診断的評価』

② ゆとり教育の功罪
- グループ内討議 or 個人レポート
- 論点の抽分：何が問題か
- 宿題：論拠調査（各人○○１分担）

③・全体討論（A,B）：グループごと，発表者２名／１グループ　※宿題
④・全体討論（C,D）：グループごと，発表者２名／１グループ　※宿題
→学生の相互評価
⇒『形成的評価』
（次回テーマの提出）
※ 宿題レポート：議論討論の要約「テーマレポート」

## ＜評価＞

- レポート（45%）→テーマ別（診断的評価・形式的評価（フィードバック））
- 出席　（20%）
- 発表（学生による相互評価）（20%）→形成的評価
- 議論への参加（教員，TA による）（15%）→形成的評価

⇒全体で『総括的評価』

## （2008 年 6 月）グループ B のシラバス

村松 正隆（文学研究科），板橋 拓己（法学研究科），室本 竜太（薬学研究科），
大野 宗一（工学研究科），岡松 正敏（獣医学研究院），鷲尾 健司（地球環境科学研究院），
茶本 健司（遺伝子病制御研究所），上野 倫彦（病院）

## ＜科目設定＞

【科目名】 一般教育演習「北海道の食未来」
【一般目標】
北海道の食・生活の現状を理解し，その長所を紹介する力を身につけ，短所に関しては解決策を提案する能力を身につける。

【行動目標】

・グループによる議論を通しての問題提起，解決方法を身につける。
・一般消費者が理解可能なプレゼン能力を身につける。
・調査，インタビュー能力を身につける。
・北海道の食の長所５個を魅力的にアピールする能力を身につける。

## ＜方略＞

【授業設計】

1．イントロダクション　今夜はやっぱりカニだよね。
　⇒アンケート：診断評価
2．北海道の地理　- 寒さに耐えた農作物・海産物 -
3．北海道の食産物　- スープカリーの野菜たち -
4．北海道の食の歴史　- クラーク博士はジンギスカンを食べたか？ -
5．北海道の食のヨーロッパとの比較　- エゾシカを食べよう -
　⇒小テスト：形成評価
6．栄養学の視点から　- 道産食は長寿食？ -
7．栄養学の基礎　- ビタミンって何？ -

8．食と免疫バランス１　- 体内環境の正常化１ -
9．食と免疫バランス２　- 体内環境の正常化２ -
10．食とホルモンバランス
11．品種改良の実際
12．遺伝子組み換え作物の利用　- 賛成？反対？ -
　⇒小テスト：形成評価
13．グループ発表 (1)
14．グループ発表 (2)
15．試食会・討論会
　⇒総括評価

《時間外学習》

１．基礎的な書籍の紹介とレポート
２．グループでの問題提起と議論（コミュニケーション能力）
３．実地インタビューの計画・実施
４．食材集め，料理
　⇒議事録・レポート：診断評価・形成評価

《グループテーマ》

1．道産定食を創ろう！
2．隠れた道産食材を探せ！
3．未来につながる新しい食材を探せ！
4．GM 食品のこともマジメに考えましょう。

## ＜評価＞

【工夫点】

・個人への評価とグループへの評価のバランス
・議事録の提出により，個人の積極的参加（動機）をみる
・診断・形成・総括評価のバランス

① 出席 ..... 20%
② 小テスト ..... 10%
③ グループでの議論を基にした小レポート ×2 ..... 30%
④ 議事録提出３回（含むインタビュー報告書）..... 20%
⑤ グループ発表（+ 味）..... 20%

《TA の活用》

・小テスト・レポートの採用補助
・グループ・ディスカッションのファシリテイター
・インタビュー計画補助・実施の付き添い

《プレゼンテーションの評価ポイント》

・52 ページの評価項目に基づき，教員・学生全員が評価
・「あなたはこれを食べたいですか？」を５段階で相互評価する

## （2008 年 6 月）グループ C のシラバス

石岡 丈昇（教育学研究科），朝倉 政典（理学研究院），中川 宏治（薬学研究科），
鈴木 恵二（情報科学研究科），三上 浩司（水産科学研究院），
徐　在完（メディア・コミュニケーション研究院），
笹倉 弘理（電子科学研究所），山田 雅文（病院）

## ＜科目設定＞

【科目名】 総合科目「環境破壊・再生と技術」

【一般目標】

1．環境問題に対する様々な視点を理解する。
2．理工学分野からの環境問題へのアプローチを学ぶ。

【行動目標】

1．生態系の破壊原因について具体的に指摘できる。
2．技術の環境の破壊と再生に関わる具体的事例を説明できる。
3．グローバル経済と環境問題の関わりを具体的に説明できる。

## ＜方略＞

1．なぜ今環境問題なのか———概論
2．人類の文明による環境あるいは生態系の破壊の歴史と現状
3．生態系再生に向けた生物学的な技術開発
4．環境汚染を防ぐ小さな生き物——微生物による環境汚染物質の分解
5．地球をきれいにする触媒化学
6．CO2 と温暖化——・CO2 排出量はどうやって計算しているのか
　　・排出量国別ランキング
7．携帯電話の完成に排出される環境破壊物質の種類と量
8．環境に優しい物作りの紹介——省電力設計と材料からのアプローチ
9．リサイクルは環境改善に貢献しているか？
10．ガソリン消費を減らす IT 技術
　　——自動車を例に情報の統合化・制御によるエコ技術の紹介
11．ムダなものを作らない——サプライチェーンと IT
12．大量生産と大量消費時代からの環境問題
13．農業の多面的機能と環境
14．なぜ途上国に環境問題が集中するのか？——「技術」の経済格差
15．環境改善「技術」の世界的公正化は可能か？——社会的企業の役割

## ＜評価＞

【評価の基準】

（140 人のクラス・2 単位として）

1．出席状況（無断欠席 4 回以上で不可）
2．小テスト（比率 40%）
　　—— 講義内容の確認テストを各担当教員に行う（2 回に 1 回行う）
3．レポート（比率 60%）
　　—— 1 回目の講義で環境問題に関する参考図書を 20 冊程度提示し，
　　その中から 1 ～ 2 冊を選んで書評を A4 で 1 枚程度書いてもらう

【評価方法】

1．1 回目の概論のときにアンケートを行い，受講者の事前理解度を把握する。
2．確認テストにより，環境問題の具体的な事例を説明できているかを把握する。
　また，論理的な思考力が養われているかどうかを把握する。

《ホームページの活用》
・資料の配付
・講義の変更等の連絡
・学生からの感想，質問（掲示板形式）

## （2008 年 6 月）グループ D のシラバス

厚東 芳樹（教育学研究院），難波 康祐（理学研究院），中村 祐二（工学研究科），
古賀 貴亮（情報科学研究科），笠井 久会（水産科学研究院），山内 太郎（保健科学研究院），
松田 知己（電子科学研究所），鈴木 章之（病院）

### ＜科目設定＞

【科目名】 大学院共通講義「水と生命の循環」

【一般目標】

生命の維持に欠かせない水を多角的に理解することにより人類が今後直面する諸問題を挙げることができ，その解決法を考える力を養う。

【行動目標】

・異分野の実学的な最先端の研究成果と今後の課題を専門家の視点から理解する。
・毎回授業から疑問点を調べてレポートを作成する。
・ 最終的にグループごとにプロジェクトテーマを作成し，プレゼンを行う。これを通して専門外の人に学術的に説明できる能力が身に付く要件・申請書を書く。

### ＜方略＞

1．ガイダンス ..... 厚東先生
2,3．化学（熱力学）－水の相図，水の化学－ ..... 情報科学研 古賀先生
4,5．医学－水分代謝と循環調節－ ..... 北大病院 上野先生
6,7．水産－魚類生息循環としての淡水と海水－ ..... 水産科学研究院 笠井先生
8,9．環境科学－水質汚染土壌を浄化するアルカリ耐性植物の作成－
..... 理学研究院 難波先生
10,11．生物科学－不凍タンパク質 ( 食物の冷害をどう防ぐ？ )–
..... 工学研究科 中村先生
12．宇宙科学－宇宙空間での水の再利用－
..... 電子科学研究所 松田先生
13,14,15．新しいプロジェクト提案・討論，申請書作成

《ガイダンス》

・プレゼンの形式を示す。
・単元前での水に関する知識を書くことで，自分の理解度を知る。
・実践的教育であることを示す。
・セッション毎にレポートを提出する。
・課題解決的な形式の授業であることを示す。

《レポートのフォーム》

●今回の講義について
・独創的な点
・特色，新規性
・どういう問題をどのようにしてクリアしたか？
・これからの問題点を挙げて解決法を述べる

## ＜評価＞

・セッション毎のレポート……（6 回 ×10 点）
・プロジェクトテーマ（グループ単位）の作成とそのプレゼン……（40 点）
　→ 評価シートを用いて，
　　・教員が評価する……（20 点）
　　・発表者グループ以外の学生が評価する……（20 点）
・単元後の自己評価……（おまけ）

《評価シート》

〔一例〕

・発表は円滑に進行したか？
・質疑応答に正直に対処したか？
・新規性，独創的であったか？
・特色を打ち出せていたか？
・専門外の人に理解させられたか？　etc...

## 3. 2008 年 11 月の「北海道大学教育ワークショップ」

### 3.1 参加者，プログラムなど

2008 年 11 月 7 日（金），8 日（土）の両日，奈井江町農業改善センター（奈井江温泉ホテル北乃湯）で，2008 年度第 2 回目のワークショップとして，「第 13 回北海道大学教育ワークショップ（FD）」が行われた。

今回の参加者は，本学の研究科及び研究所等から（主に北大に着任後 5 年以内の若手）教員 31 名に，他大学／高専から 7 名の教員，さらに世話人，講師，事務職員など合わせて総勢 49 名であった。

プログラムは 表 2 の通りである。

同一年度の 2 つの教育ワークショップは，基本的には同じテーマで行うという方針なので，大きく違うところは参加者の構成のみである。なお，総長の都合が悪く，代理として逸見副学長にして挨拶していただき，また脇田センター長（副学長）にも挨拶をしていただいた。

その他には，方略のミニ講義として 15 分の「クリッカー」の解説を行ったことがあげられる。

### 3.2 プロダクト

11 月のワークショップで得られたプロダクト（シラバス）を紹介することにして，まず目次代わりに科目名のみを紹介しておく。

＜グループ A ＞
一般教育演習 「大学～豊かな北大生になるために～」
＜グループ B ＞
一般教育演習 「北海道と世界～ Global issues, Hokkaido perspectives」
＜グループ C ＞
一般教育演習 「食って寝て遊んで学ぶ環境論」
＜グループ D ＞
総合科目 「地球環境を人間社会から診る」
＜グループ E ＞
大学院共通科目 「ホッカイドウ学～北海道の環境と人～」

写真 17．記念写真

表２．第 13 回北海道大学教育ワークショップ（平成 20 年 11 月全学 FD）のプログラム

## 2008 年 11 月 7 日（金）

8:15　受付　情報教育館（図書館北分館の北隣）　1 階ロビー　集合
8:30　バス出発　研修開始：オリエンテーション（挨拶 , 自己紹介）
9:45　ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着，玄関前で記念写真

10:00　挨拶　高等教育機能開発総合センター長　脇田副学長
10:10　挨拶　総長代理　逸見副学長（20 分）

10:35　ミニレクチャー「FD の目的と意義」（20 分 + 質問 5 分）

11:00　休憩（15 分）

11:15　ミニレクチャー「学生に自主的学習を促す魅力ある授業」（35 分 + 質問 5 分）

12:00　昼食 60 分

13:00　研修のオリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレーキング（30 分）

13:30　ミニレクチャー「カリキュラムの構成要素とシラバス」（15 分），「学習目標」（15 分）
14:00　グループ作業 I の課題の説明・グループ学習室への移動（10 分）
14:10　グループ作業 I「授業の設計 1：科目名・目標の設定」（60 分）
15:10　発表・全体討論（50 分）

16:00　休憩（20 分）

16:20　ミニレクチャー「教育方略」（15 分），「クリッカーを使う授業の例」（15 分）
16:50　グループ作業 II の課題の説明・グループ学習室への移動（10 分）
17:00　グループ作業 II「授業の設計 2：（目標の手直しと）方略」（60 分）
18:00　発表・全体討論（50 分）

18:50　夕食（40 分）
19:30　講演「ハラスメントの段階（ステージ）と相（フェーズ）」（大畑昇 / 歯学研究科教授）（30 分）
20:00　懇親会

## 2008 年 11 月 8 日（土）

7:30　朝食

8:30　ミニレクチャー「評価」（30 分）
9:00　グループ作業 III の課題の説明・グループ学習室への移動（10 分）
9:10　グループ作業 III「授業の設計 3：（方略の手直しと）評価」（60 分）
10:10　発表・全体討論（60 分）　—休憩（10 分）—

11:20　参加者の個人的感想や意見（40 分）

12:00　昼食（60 分）

13:00　バス出発
14:30　JR 札幌駅北口到着

写真 18．脇田稔副学長の挨拶

写真 19．逸見勝亮副学長の挨拶

写真 20．アイスブレーキング 1

写真 21．アイスブレーキング 2

写真 22．グループ討論 1

写真 23．グループ討論 2

写真 24．グループ討論 3

写真 25．グループ討論 4

写真 26．グループ討論 5

写真 27．グループ討論内容の発表 1

写真 28．グループ討論内容の発表 2

写真 29．グループ討論内容の発表 3

写真 30．グループ討論内容の発表 4

写真 31．グループ討論内容の発表 5

写真 32．全体討論 1

写真 33．全体討論 2

写真 34．山田准教授のミニ講義

写真 35．山岸教授のミニ講義

# 第 13 回（2008 年 11 月）教育ワークショップのプロダクト

（以下は，各グループの提出した成果である OHP と
記録を参照して，報告者がまとめたものである）

## （2008 年 11 月）グループ A のシラバス

中村 三春（文学研究科），坪倉　誠（工学研究科），酒井 隆一（水産科学研究院），
出村　誠（先端生命科学研究院），駒川　智子（教育学研究院），
山口　裕（電子科学研究所），山田 邦雅（高等教育機能開発総合センター）
工藤 彰洋（苫小牧工業高等専門学校）

### ＜科目設定＞

【科目名】 一般教育演習「大学～豊かな北大生になるために～」

【一般目標】

① 豊かな北大生になるために大学初年度にあたり，大学施設および教職員の利用方法を知る。

② 大学における学習方法を知る。

③ 地域および国際社会における自己の役割を認識する。

【行動目標】

① 大学施設および教職員を利用して課題の背景を調べることができる。

② シラバスとカリキュラムを理解して自ら学習計画を立案し発表できる。

③ 北大生の地域および国際社会での役割を列挙し，自分の目標を構想し，レポートにまとめる。

### ＜方略＞

前半：大学リソース研究

① ガイダンス～グループ分け
課題：北大のリソースを使い大学の国際性 etc. について調べよ

② ③ リソース訪問～図書館，情基セ，高等教育セ，留学セ，研究室ホームページ等

④ ⑤ 各テーマについて調べ課題をまとめる。

⑥ ⑦ ポスター発表

学習キャリア作り

⑧ 後半ガイダンス～課題　学習計画プラン作成，自分の目標を中心に（研究室とか）

⑨ シラバスの成り立ち

⑩ カリキュラムマップの作成 → 科目の流れ，相関図 → 現カリへの要望
→新しい授業の要望

⑪ 調書計画，キャリア設定立案（課外で調査）

⑫ 中間報告・情報交換

⑬ ⑭ ⑮ 発表（プレゼンテーション形成）

＜評価＞

① 前半の大学リソース研究の発表（中間発表）.....30%
② 後半の学習キャリア設計の発表（最終発表）.....30%
③ 最終レポート.....40%

① については，多示的に北大のリソースを関連づけて課題を達成しているか。
② については，カリキュラムマップの作成および教員にインタビューしているか。
③ 北大生の地域および国際社会での役割を列挙できているか。自分の目標を構想し
レポートにまとめることができるか，を成績評価の判断の基準とする。
課題に対し，新たな提案をした場合に，成績評価を秀とする。

## （2008 年 11 月）グループ B のシラバス

竹内 康浩（文学研究科），浅野 泰寛（工学研究科），澤柿 教伸（地球環境科学研究院），
山下　匡（先端生命科学研究院），
フィリップ・アンドリュー　シートン（メディア・コミュニケーション研究院），
寺本　央（電子科学研究所），福士　航（北見工業大学），水野 優子（旭川工業高等専門学校）

＜科目設定＞

【科目名】 一般教育演習「北海道と世界～ Global issues, Hokkaido perspectives」

【一般目標】

学生が将来国際社会で活躍できるようになるために，北海道の地域問題を知り，かつそれと世界とのつながりを理解する。

【行動目標】

① 北海道内の諸問題を列挙することができる。
② 世界で起きている問題を列挙することができる。
③ それらの関係を推論し系統立てて説明することができる。
④ 討論およびフィールドワークにより主体的に問題と取組むことができる。

＜方略＞

① イントロダクション～自己紹介 etc.
② 教員によるモデルケースの提示
③ 研究方法のレクチャー，グループ分け
④ ⑤ ⑥ ミニレクチャー，グループ討論，発表（テーマ：北海道）10%

⑦ フィールドワーク
⑧ ⑨ ⑩ ミニレクチャー，グループ討論，発表（テーマ：世界）10%
⑪ ⑫ ⑬ ミニレクチャー，グループ討論，
発表（テーマ：北海道と世界との関連）20%
⑭ ⑮ プレゼンテーション　グループ AB プレゼン 20min.　討論 15min.
フィードバック 10min.　30%
レポート提出　30%（A 4，1 枚）

## ＜評価＞

評価項目：プレゼンテーションと期末レポートで一般目標と行動目標の達成度をはかる。
評価方法：チェックシート
評価比重：授業 70%，レポート 30%
出席 70% 以上が履修の条件，60% の得点で合格
評価，チェックシート：5 段階　客観性，効果性

1. 問題提起されているか
2. 問題の背景が理解されているか
3. 解決策が提示されているか
4. 時間配分が適切か
5. 発表がわかりやすいか

# （2008 年 11 月）グループ C のシラバス

谷本 晃久（文学研究科），越川 武晃（工学研究科），入野 智久（地球環境科学研究院），森島 真帆（薬学研究院），内田 純一（観光学高等研究センター），早川 清雄（遺伝子病制御研究所），古岡 秀文（帯広畜産大学），梶谷　崇（北海道工業大学）

## ＜科目設定＞

【科目名】 一般教育演習「食って寝て遊んで学ぶ環境論」
【一般目標】
持続可能な社会を次の世代に残すために，自分のおかれている環境を知り，
行動する方法を身に付ける。
【行動目標】
① 調査対象を適切に理解し，自分の言葉で表現することができる。
② 身近なメディア・モノから環境に関する情報を読み，分類し，感じることができる。
③ 得られた情報を活用し，具体的な行動計画を策定することが出来る。

＜方略＞

リテラシー論

① ガイダンス，自己紹介，前年の成果物紹介

② パワーポイントの使い方，ハンドアウト作製法

③ ディスカッション・プレゼンテーションの仕方

“食”から見る環境

④ レクチャー（教室外活動）

⑤ ディスカッション（グループ内での議論のためのレポートを全員が提出）

⑥ 小発表（全員が一度ずつプレゼンターを担当）

“経済活動”から見る環境

⑦　⑧　⑨

“情報と物流から見る環境”

⑩　⑪　⑫

持続可能な社会の実現に向けて

⑬ レクチャー（世界の事例を示す）

⑭ ディスカッション（中間報告）

⑮ 最終発表（コンペ）～クリッカーで投票　　5 班 ×15 分

＜評価＞

1. 行動目標①を達成した（プレゼンテーション）.....30%
2. 行動目標②を達成した（レポート，4 ～ 12 講）.....30%
3. 行動目標③を達成した（プレゼンテーション）.....30%
4. 授業中に積極的に発言することができる.....10%
   （観察に基づく）

※ 評価項目 1 については，教員尾評価が 50%，学生間の相互評価が 50%。

## （2008 年 11 月）グループ D のシラバス

得津　晶（法学研究科），野口　聡（情報科学研究科），村上　亮（理学研究院），
井手 聡一郎（薬学研究院），山内 太郎（保健科学院），
仲岡 雅裕（北方生物圏フィールド科学センター），森田 憲輝（北海道教育大学）

＜科目設定＞

【科目名】 総合科目「地球環境を人間社会から診る」

【一般目標】

① 地球環境問題をより深く理解するため歴史をふまえて現状認識する。

② 地球環境問題の解決のため将来的な対策や技術開発について考える。

【行動目標】

① 歴史的な環境の変化を説明できるようになる。

② 現在，地球環境の変動が及ぼす経済・健康・人間（社会）への影響を説明できる。

③ 歴史と現状をふまえ環境問題について議論・批判・評価できる。

④ 環境変化に対する技術対策・法制度の対応を説明できる。

⑤ 環境問題への新しい対策・法制度の対応を説明できる。

## ＜方略＞

PART Ⅰ　歴史と現状

① ガイダンス

② 自然環境Ⅰ（大気・気象）

③ 自然環境Ⅱ（水資源・農業）

④ 自然環境Ⅲ（生態系）

⑤ 健康・栄養への影響（感染症・公衆衛生）

⑥ 社会・経済への影響（人口・貧困・紛争）

⑦ 文化への影響（伝統社会・マイノリティー）

⑧ ポスター発表

⑨ 総括　　結果発表・講評

PART Ⅱ

⑩ 生態系保全による気候変動・緩和

⑪ 環境修復技術（代替エネルギー，CO2 隔離）

⑫ 健康増進・食の安全性

⑬ 新しい環境経済学（排出）

⑭ 法規制による対応（諸外国の規制の紹介，不法行為法 etc. 解釈論）
　この間レポート提出

⑮ 提レポート講評

## ＜評価＞

| 項目 | 出席 | ①ポスター発表 | ②ポスターの相互批評 | ③個人レポート |
|---|---|---|---|---|
| 配点 | 10 | 25 | 25 | 40 |
| 対応する行動目標 | | 1）歴史<br>2）現状<br>3）議論 | 1）歴史<br>2）現状<br>3）批判・評価 | 4）対策<br>5）提案・批判・評価 |

# （2008 年 11 月）グループ E のシラバス

齋藤 哲志（法学研究科），池辺 将之（情報科学研究科），南　篤志（理学研究院），
山田 浩之（農学研究院），吉田　繁（保健科学院），
傳法　隆　（北方生物圏フィールド科学センター），諏訪 淳一郎（弘前大学）

## ＜科目設定＞

【科目名】 大学院共通授業「ホッカイドウ学～北海道の環境と人～」

【一般目標】

学部で学んだ専門知識を活かして，地域社会に寄与することを目指して北海道の現状を理解する。

【行動目標】

① 社会科学的手法と自然科学的手法を用いて，北海道の現状を分析することができる。
② 北海道への深い理解を通じて，地域研究の一つのモデルを構築することができる。

## ＜方略＞

① ガイダンス
　北海道の自然と環境Ⅰ（北海道史概論，北海道の都市環境）
② 北海道の自然と環境Ⅱ（河川と海，森と湿原）
③ フィールド体験Ⅰ（海・河川・人里・湿原）
④ フィールド体験Ⅱ（北海道資料館見学）
⑤ フィールド体験成果発表（人と自然との共生について）
⑥ 北海道の産業構造について学ぶ～ 60 分の講義とテーマに沿った 30 分の課題
⑦ 北海道にちなんだ商品の企画～マーケティング実践
⑧ 招待講演：石屋製菓「食と安全と白い恋人」
　　田中義剛「花畑牧場の成功秘話」
⑨ 企画発表とコンペティション～学生により順位を決定する。
⑩ 企業見学：ソフトウェア会社 BUG，石屋製菓　etc.
⑪ 北海道の人と社会・総論～対談型講義（スラ研教員 & 地方行政学教員）
⑫ 先住民文化の現在～アイヌに聞く
⑬ 周縁を考える～ロシア人カニ漁師に聞く
⑭ 財政破綻の現実～夕張市職員に聞く
⑮ 国際行政と地域～サミット地元側担当者に聞く
（予習）グループ毎に質問事項を作る
（復習）インタビューを基に小論文作成
　　～更に休暇中にフィールドワークを行う者には個別指導

＜評価＞

① 1～5回，6～10回，11～15回までの
毎回の小課題及び発表 ..... 各20%（計60%）
・学問的手法による具体的事例の分析力を評価する。

② 最終レポートとして全講義において得られたポートフィリオを基にした，
総括的なホッカイドウ学のモデルを提示する。 .....(40%)
・分析から得られたモデルの構成・独創性を評価する。

①は担当教授が2名ずつ評価を行う。
②最終レポートは，6名で評価を行う。